

## 近代日本建築教育の研究

—早稲田大学建築学科・早稲田工手学校・早稲田建築講義録を事例として—

建築教育	早稲田大学建築学科	早稲田工手学校
校外性制度	佐藤功一	

『早稲田建築教育の三つの機関／制度の構造ダイアグラム』

### 第1章 序論

■研究目的

建築教育は近代日本建築の素地となったものとされる。<sup>1</sup>近代建築教育とは、明治期から始まった、大学や専門学校などでの高等教育を指す。1909年創立の早稲田大学建築学科<sup>2</sup>（以下「建築学科」）はその一つである。関野克<sup>3</sup>は建築学科を、量よりは質の達成が特色であり、言葉をかえれば、エリートの教育を行なっていた教育機関としている。ここでエリートと呼ばれる存在は「建築家」<sup>4</sup>である。一方、同時期に、早稲田には建築学科とは別に、二つの教育機関／制度が存在していた。一つは1911年創設の早稲田工手学校（以下「工手学校」）<sup>5</sup>、もう一つは早稲田建築講義録（1926年から1939年までの資料が確認済み）（以下「講義録」）<sup>6</sup>である。早稲田大学建築学科と上記二つの教育機関を含めた三つの教育機関を総体的に扱った研究は今まで発表されていない。<sup>7</sup>

本研究は、近代日本建築の重要事項の一つである「建築教育」を扱うものであり、三つの教育機関が並存していた時期の早稲田の建築教育を対象とする。<sup>8</sup>そして、早稲田の建築がいかなるものなのか、近代建築においてどのような位置を占めるものなのかを探ることを目的とする。

■研究方法

建築学科・工手学校・講義録という三つの教育機関のカリキュラムの比較・分析を行なう。

次に、三つの教育機関に大きな影響を持った人物として、佐藤功一<sup>9</sup>がいる。建築学科においては言わずと知れた創設者であり、工手学校への尽力に触れた文章は多い。また、講義録については、伊東忠太<sup>10</sup>、内藤多仲<sup>11</sup>と共に監修を行っている。そこで、まず、佐藤の言説や既往研究を通して、佐藤の教育観について研究する。次に、カリキュラムの分析から、三つの教育機関の卒業生以外で教員として採用されている人物の分析を行う。彼らが佐藤功一及び三つの教育機関とどのような関わりを持っていたかを探る。

以上をまとめ、総体として見た早稲田の建築とはいかなるものなのか、そして、近代日本建築における位置づけを考察する。

### 第2章 三つの建築教育のカリキュラム

本章では各教育機関の授業カリキュラムを比較・分析を行う。分析項目は、授業名・担当教員とする。これらの項目を通して、各教育機関の変遷を確認する。本論では主に以下の資料を用いた。（建築学科:『近代日本建築学発達史』（1972,丸善）<sup>12</sup>/工手学校:『早稲田工手学校要覧』<sup>13</sup>/講義録:『早稲田講義録内容見本』（早稲田大学出版部）<sup>14</sup>）こ

2012.11.15 卒業論文発表会
早稲田建築・アーカイビングゼミ
堀井隆秀

『早稲田建築教育の三つの機関／制度の構造ダイアグラム』

れらは各講義名と担当教員がまとめられている。

■授業名での分析

授業名の分類に関しては、歴史／構造及材料／施工／法規／設備／基礎デザイン・設計製図／その他で行った。各教育機関の授業をこの分類に当てはめ、各系統の割合を比較した。また、それと同時に、授業が各教育機関でどのような変遷をしたかをまとめた。

結果、建築学科と講義録の授業傾向の類似性、また、工手学校が製図・構造に多くのを割いていることが確認できた。更に、建築学科・工手学校のカリキュラムが未完成のまま始動したこと、講義録は先行する建築学科と工手学校をもとにして、ほぼ完成した状態で始まったことが確認できた。

■担当教員での分析

担当教員については、まず、『早稲田理工學會々員名簿』（1943,早稲田理工學會）、『会員名簿』（1936,早稲田稲友會）を参照し、建築学科・工手学校の卒業生を洗い出した。結果、三つの教育機関の全担当教員（86人）のうち、56人が建築学科の卒業生、4人が工手学校の卒業生であることがわかった。<sup>15</sup>卒業生の採用が見られるようになるのは、初めての卒業生を輩出してから約15年後の、1920年代後半である。

それ以前の、建築学科創立期は佐藤によって集められた帝大出身者が教師となり、1920年代後半からは教員の大部分が建築学科の卒業生であった。また少数ではあるが、卒業生以外の教員がいることも確認できた。

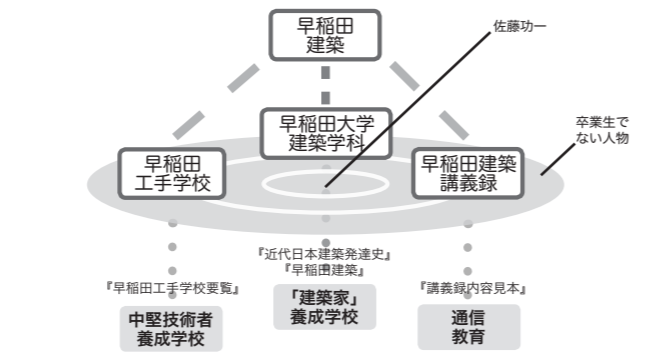


図3 早稲田建築教育の三つの機関／制度の構造ダイアグラム

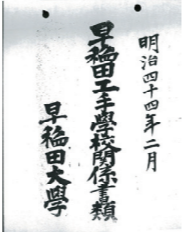


図1『早稲田工手学校要覧』



図2『早稲田建築講義録内容見本』

### 第3章 三つの教育機関の形成と波及

本章では、第2章でのカリキュラムの復元をもとに、三つの教育機関に関わりのあった人物の分析を行った。対象人物は佐藤功一と建築学科・工手学校の卒業生以外で教員となった人物である。佐藤功一については三つの教育機関の創設者であり、教育の中心となった人物と考えられるため、教育に関する言説を分析した。卒業生以外の教員については、彼らがどのように早稲田、そして佐藤と関わりを持っていたかを分析する。

■早稲田建築主任佐藤功一

佐藤の教育についての考えが述べられる言説は、二つに大別できる。①早稲田大学建築学科創設期の時期／②1920年以降の二つである。

①期で、佐藤は自身の建築観と共に、早稲田大学建築学科について述べる。それは、「**手ッ取り早く言えば、高等工業学校と帝國大學との中間に位する様なものである。**」<sup>註16</sup>と位置づけ、明治時代の、国家的建築家とは異なる像の建築家の養成を目指したものであった。そして、それは、これまで建築家が作るものとは考えられていなかった、人々に必要とされる公的な建物を作る**"建築家"**の養成を目指す宣言であった。

②期では佐藤の教育への別の姿勢がみとれる。①の時点では、明治時代の建築よりも広範を対象としようとしていたが、②期では別のかたちで拡大されるのである。佐藤は、**日常生活に必要とされるもの、個人的生活に用いる小製品から都市に至るまでものの美化が必要であると主張し、それを広く指導するべきだと述べている。**<sup>註17</sup>

①期では建築への教育の姿勢、②期では建築を含めた日常生活での必要物の美化のための教育の意識を確認することができた。

■建築学科の卒業生以外の教員

早稲田の卒業生ではなく教員に採用された人物の傾向は大きく二つに分かれた。i 建築学科・工手学校の創立期に佐藤が呼び寄せ、その後も早稲田の建築に長く関わっていた人物／ii 早稲田の建築の成熟期と考えられる1920年代後半以降に教員になり、そのまま長く関わっていた人物、である。iの人物には、伊東忠太・内藤多仲・岡田信一郎<sup>註18</sup>・今和次郎<sup>註19</sup>・吉田享二<sup>註20</sup>が挙げられる。iiの人物としては、森口多里<sup>註21</sup>・戸野琢磨<sup>註22</sup>がいる。これらの人物と佐藤功一との関わりを、各々の人物の追悼文などから確認した。

結果、早稲田建築のカリキュラムは、佐藤の興味・関心と共に広がり、その広がりに対応できる人物を佐藤が外部から採用していることが確認できた。



図5 早稲田建築における人的ネットワーク図

早稲田大学創造理工学部 学部4年

### 第4章 近代日本建築と早稲田の建築教育

三つの教育機関の総体として早稲田の建築を考え、その近代日本建築での位置づけを考察する。

■三つの教育機関の理念

建築学科と工手学校は、建築家養成と中堅技術者養成<sup>23</sup>という相互に支え合う関係である。二者は、世の人々が必要とする公的な建築を作る事を目指して作られた。また講義録は、佐藤の「工藝」の理想に対応するものであり、日常生活の美化を目指したものであった。以上の三つの教育機関の一つの共通点として、世の中一般の人々に対しての働きかけという点が挙げられる。

■近代日本建築と早稲田の建築

建築学科と工手学校の二者が公的な建築を目指したのは、国家的な建築家像とは違う径を目指してのことであった。一方、講義録（＝「工藝」）に見られる「日常」への視線は、「民藝運動」<sup>2</sup>を佐藤が批判したことから、「日常」への意識だけでなく、「国家」的な意識も併せ持っていたことが確認できた。

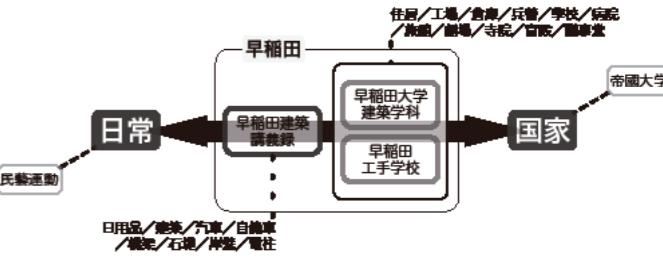


図6 近代日本建築における早稲田の建築教育

結論

本研究では、「早稲田建築」における三つの教育機関の存在を指摘した。次にそれらのカリキュラムの復元を行い、授業名・担当教員の分析を行った。担当教員の分析から早稲田建築の形成期から波及期を明らかにした。また佐藤の建築教育論と合わせて、早稲田建築が目指していたものを明らかにした。それは「国家」と「日常」という関係の両者にまたをかけたものであった。

謝辞

本研究を始めるにあたり資料を下さりました早稲田大学大学史資料センターの皆様、並びに本論文の執筆に関わって頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。
註釈1『近代日本建築学発達史』（1972 丸善）pp1815-1816参照。21910年に設立された建築教育機関。1877年設立の工部大学校に次ぐ古い歴史をもつ。31909-2001。建築史家。4 藤森照信(1946-)によれば、建築の設計を行う職能を意味する。明治時代では、国家を飾り付ける存在であった。5 早稲田工業学校、早稲田大学工業高等学校、早稲田大学産業技術専修学校、早稲田大学専門学校と変遷を経て、現在は早稲田大学芸術学校となる。6 通信教育制度。大学が発行する各学科の教科書雑誌を学習する。7 早稲田大学建築学科と早稲田工手学校の二つに触れたものについては、『近代日本建築学発達史』、村松貞次郎『日本建築家山脈』（1965,鹿島出版会）などがある。8 ここで取り上げた三つ以外に、1928-1951年の間に早稲田大学附属高等学校が存在していた。資料が入手困難であったためこの度の分析では対象外とした。早稲田建築の流れとしては『WA』2011特別号（2011,稲門建築会）を参照。91878-1944。日本建築史を大成する。早稲田建築に創設期から関わる人物。111886-1970。建築構造家。「建築構造学」の創始者であるが、この学問が生まれた由来は佐藤のすずめからである。12 参考とした。『近代日本建築学発達史』は一次資料ではない。131911-1919,1923,1924,1926,1928,1931,1932,1933,1934,1935,1936,1937,1938,1939年のものが収録されている。14『早稲田建築講義録内容見本』は実際の講義録ではなく、広告用の冊子であり、実際の内容は抜粋という形で一部のみ掲載されている。また、1930年前期のものに関しては図書館にもなく確認できていない。15 早稲田工手学校卒業生の四人は、後に早稲田大学建築学科も卒業している。16 佐藤功一「高等建築技術員養成に就て」『建築世界』1912年1月号（1912,建築世界社）pp8,1,39-40より引用。17「實生活の藝術化としての「工藝美術」の振興」『中央公論』1922年10月号pp395,19-16参照。181883-1938。建築家。佐藤と岡田は25年来の仲であった。191888-1973。考現学を提唱したことでも知られる。岡田の紹介により、早稲田を訪れ、佐藤功一・柳田国男らと「白茅会」活動を共にする。201887-1951。建築家。建築材料学の權威として知られる。今によれば、吉田と佐藤は気性が合わなかったようである。211892-1934。美術史家。早稲田大学英文科に通いつつ、伊東忠太、佐藤功一の指導のもと、卒業論文を書く。221891-1985。日本初のランドスケープ・アーキテクトとして知られる。1923年より建築学科で庭園学の講師となる。23 建築家と職人の技術的な橋渡しを行っていた存在として知られる。24 柳宗悦らが中心となって行った運動。農民の制作物に美を見だし、民藝と呼び賞賛した。図版出典1 早稲田大学大学史資料センター所蔵。2 早稲田大学中央図書館所蔵。3,5,6筆者作成。4 稲門建築会『早稲田建築』（1991,稲門建築会）より。

<sup>[1]</sup> The study of Japanese modern architectual education

<sup>[2]</sup> HORII Takahide

<sup>[3]</sup> Undergraduate student.school of Creative Science and Engineering,Waseda Univ.